

101) 花泥棒

さる神社の境内の裏山に、とても奇麗な真赤な椿がありました。母もこの椿が大好きだったのですが、小生は母の日にこの椿の苗を、カーネーションの代わりに母に送ろうといつか思うようになっていました。この椿の下にはいくつもの小苗が生えており、中には結構大きな苗もあったので、小生は、日暮れを見計らって、家からでっかいシャベルを持ち出すと、神社の裏山に行って、この椿の苗木を掘り始めたのであります。幸い地面は柔らかく、鬚根もたっぷり着いた立派な苗を掘り起こすことができたので、喜び勇んで家に持ち帰りました。苗木は見事に活着し、翌年小さな蕾がつけました。私も母もあの八重の真赤な花が咲くことを楽しみに、蕾が膨らんでくるのを待ち望んでいたのですが、花が咲いてみると、それは何処にでもあるつまらない赤い花でした。実生苗というものは、しばしば親とは同じに、ならないものなのであります。同時に泥棒と言うものはなかなか実らないということがよく分かった次第です。というわけでその神社の前を通るたび毎に、頭を下げてそのことをお詫びしているのであります。